

卒業式辞

この春に、社会人として広く世界に旅立つ卒業生、大学院修了生の皆さん、また、これから何年間か、さらなる学究の意欲に燃えて進学の道に入られる皆さん、それぞれの新しい旅立ちにあたり、一言、はなむけの言葉を述べさせていただきます。

私をはじめに申し上げたいことは、今日のこのよき日も、それぞれの長い人生における一つの節目にすぎないということ。五年後の三月、いや、来年の三月にも、皆さんは、きつと今の喜びに満ちた瞬間を、今の心もちとは異なる冷静な思いで振り返ることでしょう。どうか、そのときに、私が、これからお届けするささやかな言葉のほんの一文でも思い出していただけましたら幸いです。

何よりも皆さん一人一人の胸に刻んでほしいのは、自分が今、この時代に生きられることの幸せです。二〇一五年三月を、この日本で、主に二十代という若さで通り過ぎることのできる幸運といつてもよいでしょう。しかし、他方、人口七十二億五千万人が生きる世界のいたるところに、苦しみの声が満ち溢れています。どうか、自分の幸せや、自分の理想の追求だけに目を奪われず、そうして苦しむ世界の声々にしつかりと耳を傾ける勇氣を持つてほしいのです。現代の日本に生きる、七十二億五千万分の一としての人間に課せられたミッションとはそのようなものではないでしょうか。そして今、この瞬間、皆さんが、自分は幸せであると感ずることができるとしたら、それは、皆さんがまさに「青春」という、稀有な時を生きているからにほかなりません。皆さんにとって「青春」とは、おのずから溢れ出る力です。しかし、「人生八十年」と呼ばれる私たちの長い人生を支えてくれるのは、じつは、おのずから溢れる力ばかりではないのです。と同時に、青春とは、現に今ある二十代という人生の一時期に限られるものでもありません。皆さんの両親にも、皆さんの先生にも、いや、この世界に生きるすべての人々に、時と所を超えて、青春はあまねく存在する。

最近、私は思いもかけず、アメリカのある無名詩人の詩に出合うことができました。詩人の名前は、サミュエル・ウルマン、一八四〇年にドイツのユダヤ人家庭に生まれ、その後、両親とともにアメリカに移住、後半生をアラバマ州で過ごした人物です。ウルマンは、教育者として、またユダヤ教の説教師として、また実業家として幅広く活躍しましたが、その生涯の多くはあまりよく知られていません。これから引用する「青春(YOUTH)」と題する詩は、彼の家族が発行した詩集の巻頭に収められたもので、この詩集の刊行から、二年後の一九二四年に八十四歳でこの世を去りました。では、朗読します。

Youth is not a time of life ; it is a state of mind ; it is not a matter of rosy cheeks, red lips and supple knees ; it is a matter of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions ; it is the freshness of the deep springs of life. Youth means a temperamental predominance of courage over timidity of the appetite, for adventure over the love of ease. This often exists in a man of sixty more than a boy of twenty. Nobody grows old merely by a number of years. We grow old by deserting our ideals.

青春とは、人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う。薔薇色の頬、紅の唇、しなやかな手足ではなく、たくましい意志、ゆたかな想像力、燃える情熱を言う。青春とは、生命の深く清々しい迸りを言う。青春とは、臆病さを退ける勇氣、安きにつかんとする氣持を振り捨てる冒険心を意味する。ときには二十歳の青年よりも六十歳の人に青春がある。年を重ねただけで、人は老いない。理想を失うとき、初めて老いる。

You are as young as your faith, as old as your doubt ; as young as your self - confidence, as old as your fear, as young as your hope, as old as your despair.

人は、信念とともに若く、疑いとともに老いる。人は、自信とともに若く、恐怖とともに老いる。人は、希望ある限り若く、失望とともに老い、朽ちる。

この詩はまさに、近い死を見越した、ウルマンが達した一つの絶対的境地だったのでしよう。肉体的に若いという自信だけに安んじてはいけない、青春とは、あくまで、意志力、想像力、情熱の力にある、と言うのです。たしかに私たちは、日々、疑い、恐れ、失望に苛まれ、時として自分の生き方を見失いがちです。しかしそのときでも、自分のうちに、しつかりと意志力、想像力、情熱のありかを見つめる努力を失うなどウルマンは呼びかけています。では、どうすれば、ここで言われているような「青春」を自分の中に探りあてることができるのか？

イギリスの有名な経済学者ケインズの言葉が考えるヒントになります。ケインズは、何と、二〇三〇年までに、人間は、週十五時間程度働けば済むようになる、と予言しているのです。週十五時間、ということは、週五日、朝の九時から昼の十二時までの労働で十分ということになる。恐ろしいというべきか、歓迎すべきか。しかし、仮にもしこれが現実化した場合の生活を考えなくてはいけません。なぜなら、人生八十年が、ことによると空白だらけ、隙間だらけの時間になりかねないからです。そこで私たちはこの長い人生をしつかりと充実して生きるための準備に明日からでもかからなくてはならない。皆さんにとってそれは、私たち大人の世代とはまた別の意味で大きな困難を意味するものとなるでしょう。でも、妥協は許されないので。何よりもまず、自分と対話し、自分のなんたるか、自分の中にある新たな「何か」を発見しなければなりません。一週間は、百六十八時間です。日々の暮らしの糧を得るための仕事のほかに、人生の時間を豊かに満たすことができるもう一つの自分の発見に努めてほしいと思います。「石の上にも三年」と言いますが、持続こそは力です。十年間、新しい何かにじつくり付き合うことができたなら、それはもう、立派な才能の証です。そしてそこから得た自信、そこから得られる喜びこそが、逆にまた、皆さんの、新たな意志、新たな想像力、新たな、燃えるがごとき情熱を生み出す原動力となるのです。

最後に、卒業生、修了生の皆さんへのお願いです。皆さんが今日別れを告げる私たちの名古屋外国語大学は、まだ歴史の浅い大学です。皆さんの活躍の一つ一つが、私たちの大学の歴史を作り、その基礎を固めていくのです。どうか、名古屋外国語大学に「学んだ」、そして「卒業した」という誇りを、いつまでも大切に胸に秘め、その自覚をもって生きてほしいと思います。そして私たち、教職員一同も、皆さんが、この大学で学んでよかった、卒業できてよかった、と一生思っていただけの大学であり続けるよう、限りなく努力を積み重ねていきます。皆さんのこれからの努力と、将来における活躍によって、私たちの大学NUFSの輝きと未来もまた、日々、新しい生命力を得ることができるようです。

最後になりましたが、何より、皆さん一人一人のご健康とご成功、末永い幸福を祈念して、学長の式辞とします。

二〇一五年三月二十二日

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫